記

永和女鑑

書翰文附録

全

へ 5
5583

門 へ 5
號 5583
巻

[library seal]

松嶋行

いさゝらは松しまの月よ蝉の声　以茶坊

此嶋ハ嘉祇連衆へ岩のたつか首途のこと給を
始くれけれより宮本に至りそと則其

宮城の□宮湯に浴せんとて五月五日既に七日
東湯の湯の宿りて八日の夜よりの山ひの塚下へ出けり
以茶郷よ閑国の嘉祇より山形なる山館庵に携り
みちより加茂の方は出ひて月形の花をはなれ
りとてとて湯の在と行て其ころ山
との高森の館守の代仰ふちりきゝ松嶋の

38- 7244

なく枝を向んとやらうと作り侍の由なる様の
たえんとや旅ら旅の出来こら終に所方なくなりしれ
そうなどとるるものとく

ゆきしと首途をあはけし園うか　　未涼坊

杜し偶のそ[illegible]鶴にう海風し　　菜岳坊

今月いつ四五日[illegible]

[illegible]

右とやかう毒ふく枝の青涼し　　以察坊

山梨より一里余り行て[illegible]

涼しさや[illegible]　　仝

[illegible]

是より深川の芭蕉庵にて百合の花を
咲かせたるを其角坊へ送りて雨の後に折えさせて
扇にかかりて此句の意を尋ねられ、かの大津絵の
翁をとりて付けし古代の様に植ゑて其角が百合を
かくさるるは此日頃の晴れ風流なりしとかく思ひし
折から是も折角に傳へて、よもや忘れしそこの
ことにもなりぬ

二鉢の花に笠きて白ねの百合の花　素琴

をみなへしの宵にもあるを忍ぶ哉　以敬坊

折にふれ花白百合か手向草　九折　菓年

添ひ来るここ四里宿の中川の家の村もさながら

折から時雨の忌辰に当りて此日も空曇り
行きて翁の画像を拝し　国々より寄せたる句々八旬余り
にて此の所に詠み手向けて涙のみ降り行く方とも
此程は机の前に侍りて其の頃を偲び
ありし昔の面影を思ひ出でて此の月の夜を
語りあひ見しのみにて人々心を尽くしも
おしみて我も今夜はかの翁のやさしき初冬ん
なりて懐かしみ降りし雨の夜の侘び心
枕をしてねられぬの庵にぞ住みける

時雨の日は翁の忌日にて　菓年

十月翁の忌日にも暮るるまでに二度三度
限りある日数の旅をも心に留めて
此の頃の心を述べて

笠嶋や武隈の松は四里あまり昔の跡ならぬ様
ならずして仙台に至る所は日ハ宮城野あり乃
案内まかせはゝしハ図宮城野ハありかゝる遠
野山をゆく先の比丘尼坂野田川其の外塩竈まで
の間名所あまた古跡の所々路次のすがら御門にて見るに
おしえられて案内の男まかせなりし

松の葉も風吹しめちるや　比丘尼坂　　素宗

奥の細道十府の菅こも其ほとりの橋ハ縁起に
見ゆるところにして絵にも見ゆる清門に続きたる
古蹟ありけり碑の碑にいたる多賀の城跡を拝みて
末の松山沖の石もとおもひめぐりて若葉の
面影は侍しける潤色に聞けて塩竈へと急ぐ　三

去年の色なる月も庭前の江を見ての様もあるよ
気色に末の松山は御武末此所柳なとに見えし
絵の野田の玉川見ふし見る松あるかなと見えかなり
盛んとして塩竈へと急ぐ

塩竈の明神詣て侍りて後加賀の殿より
船をかりて島々に松島へ渡るところ経
あり我等の先へは小嶋の浦島を拾ひ諸
島見えしてゆく細やかに数千とは寛
之と奥の細道と言ひて此所を見事なり
祖翁の跡を見てとなりて其の風情を今
目のあたりに聞くと思ふにて見えて
松島へ渡りて富嶽夜もわすれず
そのかみ眺望やなもふ清くやかな船で
雄島瑞巌の岸に見え侍りぬ

松島や詠ともゆる秋の暮　紫雞坊

涼風のみちあれて松はつきも涼しかり　東涼

松しまに泊し渡帆しまかれて栄行ん　菜平

俳諧は　祖翁の墳を俳諧とする日は
彌生月中の二日にしておもひたる祭
甚だしく日に尚らの風雅佳遇の縁を
以て文字此の新ひ令官はしくめでたき
より無き所顧恩の捻香を秘る前
寿して

まなこの汗や手向水　以水坊

此墳に通ふもちる涼しき月　菜平

是　祖翁の遺骸を葬る墳は湖南の
木曽寺とて見よし所じの山に
築き固めて建テはし消しもぞ此墳を
新に所官の俳諧にては移し得るは
碑前に跪く日々に五月もぞの墨知
日まうるにも様に何ぞ投筆身
一の好風を言ひて又もてはせの
年の月又もけ一章を手向
なすけまうり

夏深き此の松しまや翁塚　東涼

松島は我がかひの宮に来りて信ひうひちてりして
よし宮のとの佳境をとみるの二里余にして山の峰寺観堂
まきなりまさ是寺を富山大仰るものにぞ此碑建つ

ここより行すゑは路の眺望一眼界に納りて往来のさま
あからさまに宜なり埋し又松路の入たる
高縁の古き祠を済り川を入路の行先に徑路の
ちまたの行の此橋より市なるの方へかへる路
をなす堤の下の所にしてかりて堤より方より
風景は浅く石の川下ちる橋にて程をわたり次
近き所田面を通り右の馬の傍すすむ次
千住の青田に流れたる風情となる此山の
神の森にて見ゆる此の路外まへさかりは
ここの往の枝にいつもして人の行の際の路をまたの
馬やるとてんなかく声ある人は向山のさとの
傍りて此橋とよる所を過ぎる佗路の語外なる
松縄とまて高の駅より馬と借りて行まで

さて爰に殊に笠もなくて菜の花ここにさかりなる
男のかれるとりなから行き風情おかしき事あり
うちに行き此まる所に入らのすこしく是より
その先の宿のある五里余なりし行きよし宿となる
駅より馬と続ける所にて彼おのへの新紙とかく
拓きめりて此前に住む白な路をまかりて新かをおのへ
名をこの一筆つ書なる草年前に結けて

菜の花や路の傍にまかりける　巣卑

おのこよ往来に書かるしとをくはかの科解短冊
よるに二枚載られるのまま出しをして是その
道しるべを即当りに付るも知らぬ馬の口とるのを
ふもかの旅の恋あれは何とかかるんと跡を隠て
御身をやんと語ることもなれんおもはく隠く

おまへみやこを出て小中田の里へ入るまえより越井
須の関をかゝりて越の国へ出る所にて旅人あまたなる
所なれば宿易く宿借りて留まる人も多く馬角にて
名の何事も許へ見物して郷中事繁と
餘きける也

松嶋の帰るさ尾花沢の方へ来るとて
小野田といふ里にて行き暮れ宿を求め先
たゞ小家なる長者の伊達何某は
旅の宿をも貸さるへきとて深切に
もてなしけるを謝して宿をかりて雲
もれ清き月の夜なりしに風呂に入りて茶なと
なかりし様子にて短夜ともおもはれて宵
中句の清光も一しほなりけり

宿とりて朝たつまでも秋の夜の月　紫蔵

此清水ませし旅の夜の月　未流

清水やよしや月も澄み通る宿　蓬舟

小野田より出て七八里行て関を越へ下るまで峠を
見下ろし巌に岩清水の瀧しぶき紅葉に陽の光の煙
流れて谷に落ち下りて宮城縄山越と出て石路
此所より五六里を経て尾花沢に泊りて鈴木
清風の二子を訪ね来ると深切にもてなし給ひ
数日猶逗留しける間の宿よりも鳥取に到りしは十五日
大石田なる馬場の所にて案内にてくだしまる

さみだれの月五日の夜より酒田のごとく
舟しつて送りて大石田なる宿の主に
ともなひて酒田へくだり小舟にて

西風の住れ[illegible]すと盛しさ

あさ緑涼しさつるゝ月のかくれ　以哉坊

ふねも舟に出るゝ川に涼みけん　菜年

宗七川の[illegible]大谷田[illegible]呂[illegible]子[illegible]
そのそれ風雅の交りを結びて

薫風の[illegible]も[illegible]川[illegible]よ　素涼

船中の吟

舟中の[illegible]も涼しさ宗七川　仝

下[illegible]も乱涼し宗七川　菜年

舟佐行一折　以哉坊

小船して[illegible]行[illegible]も宗七川

涼しや月の影も十五夜　素涼

森[illegible]の[illegible]やすや小[illegible]　菜年

[illegible]川[illegible]　坊

蓮[illegible]小舟の[illegible]　房涼

ちる茶をこほる膳所　乎

ちよ川くるみのすゝも神のあら鈴　坊

見てもなしは婦の二の宮　涼

かくれてのこし麿にみはからう　乎

うれ枝に出あさき御覧白ひの　坊

笹帰の我にあそうの小袖やう　涼

わ結路ちまとはなし帽子なき　乎

森法りもかまはの糊細工　坊

しし肩てんまの錦衣金襴　涼

何よはる都をさらに請しも　乎

古き我みしの雲も半ば　坊

まゐらせはよ住みはくとは和　涼

たえあるにたはせに蒼れ盆　乎

此一折は酒田の濃府にて舟子の下すこしの程の
は旅を稼き枕にゆきしたためる
田の客人たるしにてはなしとまかりたり
ありし行の新しき十七日の夜文使のかへり
待ちて到る

大石田より酒田迄く二十有余里の
此川さへ最上川の水に涼みし夕へは
陸中より移しに青蘿堂にとまりて
立寄侍りに其あるじの志ありて
此を忘れし此を得物よりおしえて
一夜の名の為て詠しまいらせ候

井戸水に気も汲みて又涼し

以未坊

此坊の行脚の侍りし候月
すゑに酒田の地に来滞りて
かの人の名也と文通子の亭に
侍りしを此を慈に写ら行く
時の客も物志川のあたりより一下向より

後の事なきにあらす去ぬる
日ころ柱杖侍ひの夢の竹の秋の虹
に晴ぬれも心よりもの後ありしと
ありし此志の盛なり行く

如川と月に流るる新酒や秋の風

素琳

雪竹房主人住出る名に来
象潟を行脚と乞て最上川客の酒田
なる文通子と君行よりて先の
おもひて此を慈物ある許行て

見るも同じ涼しさに道ある葱

菜草

此日のつりあるは酒田とふて青塚の里中まく三里[illegible]
浜比そ象潟の塩の浜ハ眺望[illegible]限り
[illegible]出[illegible]集[illegible]り[illegible]然[illegible]も[illegible]
[illegible]佛[illegible]て蒼海の[illegible]足を[illegible]く[illegible]鳥海の
[illegible]空中[illegible]おの[illegible]の里
[illegible]小[illegible]川を[illegible]ま
[illegible]象潟も[illegible]ひと
[illegible]の[illegible]や
むやの関を[illegible]佳境ま[illegible]

象潟の雨も[illegible]し 浜比な[illegible] 曽年

汐浦や [illegible]ま[illegible] 東源

[illegible]むしや[illegible]の月も[illegible] 如水坊

[illegible]のこま[illegible]乃手も[illegible]を[illegible]
八十八潟九十九森の[illegible]
[illegible]
[illegible]蚶潟[illegible]
[illegible]
[illegible]漂泊も[illegible]月[illegible]
[illegible]
[illegible]雨[illegible]
高[illegible]
[illegible]

蚶潟や[illegible]小夏も夜[illegible] 如水坊

象潟の[illegible]や[illegible]のある[illegible] 東源

酒無や春をしむ者は今朝の秋　菜牛

汐越の里なる金何某の家に蔵り
持伝へし　祖翁の真跡を書写せしを
乞得て謹て浄写す

象潟

象潟の雨や西施が合歓の花

夕ぐれ舟やつなぎし其の何し舟まま
江の中と出で見て候

夕晴や桜に涼む波の華

腰長の汐といふ処はいと浅くて鶴
おりたちてあさるを

腰長や鶴脛ぬれて海涼し

武陽芭蕉翁桃青
下

三章ともに後素の揮翰一幅にて
ちらし給ふ筆の跡あるやうにて
集にあまりうしもえんかはるを
翁の御句なるを家の為まちにて

維もの五文字を汐越とおかれて
中の一字ハ字作も私修の所あまり此
句ハ祖師のたましひを顕しけれは
蓋加の本懐深かれ其折ふし此紀に
源泊此好まハさらに辞見んと猶お
字まて記す

汐越と云ふハ是也象潟より此日仲
より象潟の浦あたりかゝんの磯に傍ひひて社
傍ひ太師祠の所にして六里の浦もつて
をはしるへきハ故よりてゆくに帰りし磯
へむかふ此夜寝ておもひて折し行をそれ修め

石路を帆に淡ゆるんで風涼し

素涼

兎角して此修面のあらましを記しぬ全
なるしかるを酒田乃地へ出けれは

象潟の行をはり其日の宿の句ハ山
形の地より來給ひし衆の中へ行手宮石
余ちかうし歎かして酒田に出て病から
ある俳諧のおちかはれゆきをまいりて旅
をしかりしもうへや佳句旅宿と家
の酒田なる本市行の宿にありしうちの
しかもかし此湛れ子をもかくもまた獅子の
門下にありし一方なる句を示し

涼しさやうみもちとお帆す此湊

素涼

以哉師の呼杖と号ひて飢渇へ鋭る
日くらしゆく行程既にかゝ渇えくりり
りけやこゝ御ゆくばらしく宗祇法師の舎
小夜停く集さ折ら庭まの拘折あ
取して此まゝの衛信とお行

ひやゝきに袖は風の行衛哉　　蘂年

宗祇ふ赤そりの行田の庵りまかりて左
ころす我師此柿きく呼杖と向ありしこれ
月をも嘉し行らんなと諳ら此まか
師翁のこゝろきゝまて嘉く此ぞんれむる
そはんに酒田の湊よりおくれ行るとこ

斯ゆるとおゐ秋をまもれるや脇立　　蘂年

彼ミ此日暮ての空を目ふしろ
いしろ小ちんよん伯濁しゐ屑よふ
まえ此日程ゐりくまて十日ふ余の寄る
ありお領る庭にも庭所をいてむるゝ重
ゐ年を平清小汀とおふゆ行くふ行脚の
ゐ行て此りしゆ宗祇在ゐ経乃
飛まりもいそく加ひらる府行師
ゐ行ゝ翁りし行るゝ武門の此とりの
ゝりあ奇よ我ゆ万あゐ行く湊
酒田の湊小あとおし　双島の名れ
宗後だしく道あくゝ先来あらとさ
六十里越しゝく南府の方へ杖くと

さかりゆく絵の二所僧小かくれて
よろこひて帰る

雲の峯ふおもくら須弥の果

以乎坊

宮比遠ゆく勝僧よりて雨ととも
山形の前のあたりかゝりしおもむきの
日ぐれのとき来てしこゝろよみちかけてや月
世月のやうなおもしろき所にも寺舎れ
なかりけるよりおもちらの山ぬ海
お前の人々おもに須田の龍宮よ其の社
をとふし帰りける

宮川と思ひつゝおもふ松をもく
百日紅

素涼

出形の前途に五十余山の松ふ涼風の
清ろの寺に絵もひ須田氏おもしろく
百日紅のさかりしころよしのを
とめおもしろきと此僧の雲根須田氏
行くと来てとまれなかりし

跋

此頃書林何某の折ふし来り
松修輯録して志あると云ふに等閑なる
未だ篆草年丸高雨皆ものの梓を苦ま
せられけるを人に模の鋳と云ふ画し
後京に道遠の句を給ふ我おもふをたち絵は

我ともと浦山しきかくしてをありける
されを妹草稿の見れはまあらんする風雅の
心を寄て是を見るに近からんとを免て
梓行の沙汰をおよひぬ

帰童仙

素綵坊　兔刻

巣阜坊　元旨

京寺町通二条下ル　和樽屋治兵衛梓